



青白磁刻牡丹紋大鉢
Blue and white porcelain large bowl with
peony carved
H80×W450×D450mm
磁器
2021 年

はじめに

本論はやきものの1つである「青白磁」の魅力についての考察をまとめたものである。青白磁は白い素地に淡い青色の透明な釉薬がかかった磁器である。筆者が特に関心を持ったのは、表面に文様を彫ることで生じる凹凸の部分に釉薬が溜まることで生まれる青と白の濃淡だった。加えて、2020年に茨城県陶芸美術館にて開催された展覧会「青か、白か、一青磁×白磁×青白磁」展のパンフレットに、青白磁の定義は曖昧であるということが記されており、そこに疑問を持ったことが本論を書くに至ったきっかけである。青白磁の成り立ちや白磁との境目を調べ、定義を定めることに加え、青白磁を扱う作家研究を行うことで、改めて、青白磁の魅力はどこにあるのかを考察する。

第1章 白磁の変遷と青白磁

第1章では、青白磁はどのようにして生まれ日本に伝わり、現在まで至っているのかを先行研究をもとに整理した。中国の隋時代には現代とほぼ同じ白磁が作られるようになっており、その後、宋の時代に、景德鎮窯という窯で淡い青色に発色した白磁が作られたことが青白磁のはじまりとされている。白い素地と淡青の透明な釉薬に加え、施された刻紋によって生み出される文様から、宋代の青白磁は「影青」とも呼ばれるようになった。日本には奈良時代にはすでに伝わっており、青白磁を含めた中国陶磁器は日本の製陶技術に大きな影響を与えた。17世紀には日本でも磁器が作られるようになっていたが、その時点では絵付けが主流となっており、当時の日本産の青白磁は現在のところ見られない。20世紀初頭に、小山富士夫の『影青襍記』をきっかけにして青白磁は日本の陶芸家たちに広まっていき、現在では多くの作家が青白磁の作品を作り出している。

第2章 素材からみた青白磁

第2章では素地・釉薬・焼成方法の3点から青白磁を捉えることを試みた。青白磁の重要な要素となっているのは、鉄分の少ない純白の素地と、同じく鉄分の少ない無色透明の釉薬である。素地には磁土が使用されており、カオリンまたは陶石を主として長石や珪石などを調合することで作られる。一方、釉薬には磁器釉が使われている。青白磁釉は長石・珪石・石灰で作られる無色透明となる釉薬に、場合によって珪酸鉄などの極微量の鉄分を含む原料を加え作られる。これらの素地と釉薬を使用したうえで、不完全燃焼の炎で焼成する還元焼成という方法で焼き上げることで、素地や釉薬に含まれる微量の鉄分が還元反応を起こし青色に発色し、青白磁の真っ白な素地と淡い青色が生まれるのである。

第3章 近代日本の青白磁

第3章では青白磁を用いた作品を作る4名の作家とその作品について取り上げ、青白磁による表現について考察した。一人目は塚本快示である。塚本快示は、宋の青白磁と白磁の再現を試みた人物であり、重要無形文化財「青白磁・白磁」保持者に登録されていた作家である。淡い青の濃淡を、片切り彫による端正な線で彫られた文様によって生み出された、影青の魅力が詰まった作品を作り出した。2人目の深見陶冶は主に鑄込み成形による大型のオブジェを制作しており、海外でも著名な作家の一人である。圧力鑄込みによって作られるオブジェの、エッジの効いたフォルムによって、青と白のおおらかなグラデーションを現わしている。3人目には荒々しい造形が特徴の加藤委、4人目に白磁の作品が有名な和田的の青白磁の作品を採り上げた。和田的や加藤委は、素地がむき出しになっている部分によって素地の白と釉薬の青との対比を生み出し、流水や、水と炎といった自然の要素を造形に取り入れ、そのコントラストを効果的に用いた作品を作りだしている。これらの作家研究から、

宋代から始まった青白磁が時代をへて、新たな造形、表現の可能性を広げている様子を知ることができた。

第4章 作品「青白磁刻牡丹紋大鉢」及び研究報告書

本章では、修了制作『青白磁刻牡丹紋大鉢』の制作までの過程を筆者の思考とともにまとめている。この作品は、筆者がもっとも魅力を感じている青白磁の青と白の濃淡、そして柔らかさを表現すべく制作した。美しい濃淡を生み出すためには、彫りの深さも重要であるということも学び、この作品では花びらの重なりの部分で特に注意しながら彫り進めた。大鉢の形状は、器とモチーフとなる牡丹の一体感が生まれるように花の形になるよう縁を削ることを選択した。美しい濃淡を生み出すための文様の彫り方の工夫、器の形状の検討、そして青白磁の発色の要ともいえる還元焼成の難しさなど、多くの学びを得た。

おわりに

本論文は青白磁のもつ魅力についての考察を、その定義について考えながら行ったものである。歴史や素材の面から青白磁とは何かを明らかにしたうえで、現代の陶芸作家による青白磁の造形表現からその魅力を探ることを試みた。中国の宋代で生まれた淡い青色の白磁が青白磁と呼ばれるようになり、陶芸の造形や表現方法が多様多様になっている現代においてその定義は曖昧となっている。しかし、素材の点からみると、「鉄分の少ない磁土と透明な釉薬を使い、還元焼成でわずかに含まれている酸化鉄を一酸化炭素と還元反応させ青く発色したもの」と定義することができると筆者は結論づけた。青白磁の最大の特徴である真っ白な素地と淡い青の釉薬の重なりによって生み出されている、空や水のような青が青白磁の魅力を生み出している要である。陶芸家たちは各々の手法でその魅力を様々な形で引き出しているのである。